

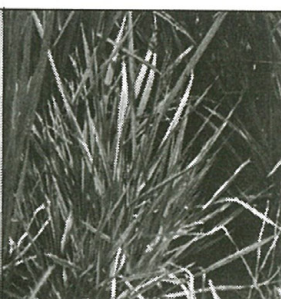
各地で話題の病虫害



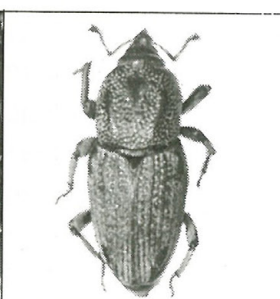
キュウリ(メロン)黄化病
(埼玉県経営普及課 吉野正義氏提供)



トランジトリー・イエローイング病
(左:健全株 右:リ病株)



グラッシー・スタント病
(熱帯稲作病害図説より)



シバオサゾウムシ

キュウリ(メロン)黄化病

Cucumder yellows virus

本病は、キュウリ黄化ウィルス(*Cucumder yellows virus*)によるもので、昭和52年秋、埼玉県及び群馬県の一部施設栽培キュウリで被害が見られた。翌53年には、両県下の温室メロン、ハウスメロン、さらに近県のキュウリ産地にも被害が広がった。

寄主は、キュウリ、メロン、カボチャ等のウリ科植物に限られている。発生地では、当初、「黄化葉」または、「まだら葉」と呼んでいたようであるが、病徴は次のとおりである。

初期病徴は、葉脈間に退緑色・不整型の小斑点が多数現れる斑点型(多湿時には小斑点が水浸状となる)と、小斑点は不明瞭で葉脈間に不整な斑紋状の退色斑が見られる黄化型とがある。いずれの症状も進行すると葉脈の間が鮮明な黄色となるが、葉脈は緑色を保つ。なお、メロンでは黄色モザイク斑となる。

病徴が進むと、葉全体が黄化して粗剛となり、葉縁は下方に巻く。果実への直接の被害は見られないが、草勢が著しく衰弱するため、側枝の発生と伸長が不良となり、着果数は減少、品質も低下する。

本病の伝搬は、接木伝染とオンシツコナジラミによる虫媒伝染で、媒介虫のウィルス伝搬様式は半永続型ないしは非永続型と考えられている。

温室等施設栽培での感染は、先ずCuYV保毒成

虫の飛来によって第1次感染がおこり、その後施設内全体に拡がるという経過をたどる。

本病を媒介するオンシツコナジラミは、広島県下で昭和49年に発見された後、急速に全国に蔓延したので、本病の場合も全国的な警戒が必要と思われる。

なお、本病の初期症状は、苦土欠乏症や農薬の薬害斑に似ているので、注意する必要がある。

稲の新病害2種

トランジトリー・イエローイング病

Rice transitory yellowing virus

グラッシー・スタント病

Rice grassy stunt disease

我が国に分布するイネのウィルス病(マイコプラズマを含む。)は、これまで萎縮病、黒条萎縮病、縞葉枯病、黄萎病及びわい化病が知られていたが、我が国未記録であった2種のウィルス病の発生が最近九州、沖縄で確認された。

トランジトリー・イエローイング病:昭和51年10月、沖縄県石垣島の2期作水田でイネわい化病類似の症状が発見され、疑似わい化病の名前で調査研究が進められていたが、翌52年、植物ウィルス研究所、九州農業試験場、熱帯農業研究センターの共同研究により、台湾で発生が認められているトランジトリー・イエローイング病であることが確定した。リ病株の症状はわい化病に酷似しており、下葉の先端が黄化、徐々に上葉に及ぶ。症状が進

むと葉身が垂れ遂には枯死する。黄化した葉にはしばしば褐色の斑点がみられる。生育初期に感染すると株のわい化、分けつの減少、出穂遅延、穂の短小、着粒の減少等の症状を伴う。本病は虫媒ウィルス病であり、媒介虫はクロスジツマグロヨコバイ、ツマグロヨコバイ、タイワンツマグロヨコバイの3種が確認されている。媒介虫は吸汁後10日余りの虫体内潜伏期間を経て殆んど一生涯ウィルスを伝搬し続ける。沖縄県の調査によると石垣島のほか、西表島、与那国島、沖縄本島でも発生を認めている。

グラッシー・スタント病：昭和53年、九州農業試験場新海氏によって、鹿児島、福岡両県下でみられるイネの黄化、萎縮症状は、トビイロウンカが媒介するグラッシー・スタント病であると確認された。翌54年には沖縄でも発生が確認され、九州における発生も相当広範囲に及ぶことが判明した。病原はマイコプラズマ様微生物と考えられており、トビイロウンカで永続的に伝搬される。本病は東南アジア一帯に発生しておりインドネシアではツングロ病に次ぐ重要病害である。本病に侵されたイネは分けつが多く、病徴は黄萎病に似るが、黄化葉に緑色部が残り、一部にシミ状の小褐点がみられる。また、発病株からは褐色穂の出穂がみられる。被害は減収のほか玄米の品質に大きな影響を与える。

両病とも海外飛来虫が発生原因と考えられ、今後西日本地域では重要病害となる可能性がある。

シバオサゾウムシ(新称)

学名：*Sphenophorus venatus vestitus*
CHITTENDEN
英名：*Hunting billbug*

昨年の7月、九州大学農学部森本桂助教授から横浜植物防疫所調査研究部害虫課あて、次のような私信が寄せられた。“6月13日、大阪府立大学保田淑郎氏から、沖縄県玉城村にあるゴルフ場のノシバを加害しているゾウムシの同定依頼を受け、*Sphenophorus venatus vestitus* CHITTENDEN シバオサゾウムシ(新称)と同定した。

本種は北米東部の原産で、この属はスゲや禾本科植物を加害し、幼虫は株の部分を食べるようだ。沖縄での被害状況や分布は不明である。”同時に森本氏より当該標本の送付を受けた。

この情報に接した那覇植物防疫事務所では、直ちに沖縄本島内のゴルフ場8か所のシバについて調査を行ったところ、6か所でオサゾウムシの発生が確認された。同事務所から調査研究部害虫課に送付された標本を同定したところ、すべて同種であった。

本種はアメリカ合衆国ではシバの害虫として知られ、カリフォルニアやハワイにも侵入して大害を与えている。成虫は暗赤褐色で、体長は6~10mm、葉や地際部の茎を食害し、茎や葉鞘に産卵する。幼虫は白色で、頭部のみ褐色、脚は無い。ふ化後は茎を摂食し、その後地下部の根を3~5週間食害する。

那覇植物防疫事務所の調査によると、密度の高い場所では1㎡あたり18頭の成虫が発見された。寄生の確認されたシバの種類は、コウライシバ、ギョウギシバ、オニシバの3種で、その他の種類のシバからは発見されていない。

一部ゴルフ場の話によると、すでに昭和53年6月頃から同様の被害があったようである。

本種は、沖縄の害虫目録に記載がなく、またシバの自生地での調査では全く発生が見られないこと及び本属が我国に産しないこと等から、侵入害虫と考えられるが、①米軍基地跡のゴルフ場だけでなく、比較的歴史が古い、昭和42年頃完成したもと原野のゴルフ場でも全面的な発生がみられる。②昭和47年以降シバの生茎葉が直接輸入された実績がない、などから侵入時期はかなり以前と考えられる。また、九州方面から沖縄へシバの導入がなされている事実もあり、九州での発生についても調査の必要があろう。今のところ、他の経済作物に対する影響はみられないが、ハワイ等にはサトウキビ、トウモロコシを加害する近縁種が存在するので、食性の変化等を見守る必要がある。

なお、本種の沖縄での発生についての詳細は、森本氏らによって近く発表される筈である。

(害虫課 尊田望之)

農林水産省